

宮崎発夢未来～感動の共感の世界中に

みやざき中央新聞

〒880-0911 宮崎県宮崎市田吉6207-3 info@miya-chu.jp Tel(0985)53-2600 Fax(0985)53-5800
毎週月曜日(第5月曜日は除く)、月4回発行/1か月1,000円(税別・送料込)

このみやざき中央新聞は号外です。こちらに掲載されている記事はすべて読み切りですが、実際の紙面では連載記事をお届けしています。社説はシリーズで書籍化されており、すでに7種類を発行、累計10万部を突破しました。

みやざき中央新聞は、毎週日曜日発行の週刊紙です。全国各地で行われているさまざまなジャンルの講演会取材し、面白かった講演内容を掲載しています。特に、前向きな明るい話、ためになる話、感動する話を掲載します。自分の脳にどんな情報を入力するか、人生は大きく変わります。実際の紙面をご希望の方は1か月(4回)無料でお送りいたします。

縁を生かす

あなたが大人になったという 事実には十分愛情をもらった 証拠なのです

ある日、その子の過去の学籍簿をめぐって見ました。1年生のときの学籍簿

作家 鈴木 秀子



【すぎき・ひでこ】東京大学人文科学研究科博士課程を修了後、フランスとイタリアに留学し、ハワイ大学やスタンフォード大学にて教職を執る。聖心女子大学教授を経て、国際コミュニケーション学会名誉会長となる。日本にはじめて「エニアグラム(性格タイプ診断テスト)」を紹介。全国および海外からの要望に応えて、「人生の意味」を聴衆とともに考える講演会やワークショップで、さまざまな指導に当たっている。

もう随分前のことなので記憶が曖昧ですが、これは私がアメリカのスタンフォード大学で教鞭を執っていたとき、同僚の友人から聞いた、スラム街で育った少年とその担任の先生のお話です。その女性の担任は、少年が4年生のときの担任でした。クラスの中でその少年だけどうしても好きになれませんでした。なぜならいつも汚い格好をしていて、授業中はいつも居眠りをしていたからです。何を言っても反応がないし、疲れ果てたような顔をしていました。先生は、「この子さえクラスからいなくなってしまうほど嫌いだった」と思っていました。

あるとき、少年がふと、今日は僕の誕生日なんだと言いました。その少年にとって心を開き、最初の扉だったと思えます。病気があったお母さんの面倒を一生懸命看っていたのに、お母さんは死んでしまった。そしてお父さんはアルコールに溺れている。いじめられるよりも無視されるほうが「いい」といいますけど、そんな中で先生が声を掛けてくれた。少年は自分が先生に受け入れられたと思ったので、そんなことを言ったのでした。

しばらくして、先生は花束と小さなケーキを持って少年の家を訪ねました。汚れた暗い部屋に二人ぼつんと座っていた少年は、先生の姿を見て子どもらしい笑顔を見せました。しばらくして先生が帰ろうとしたら、少年は部屋の奥から小さいビンを持ってきて言いました。これ、先生にあげると差し出したビンは、ふちが蝋で閉めてありました。先生はそれをもらって帰り、蓋を開けてみましたが、中は香水でした。きつとお母さんが使っていたのでした。彼にとって唯一の宝物だったと思います。先生は香水が逃げないようにまた蝋を垂らし、きちんと蓋をしました。学校が始まってから、少年は勉強を続け、成績がどんどん伸びていきました。そして、その子が6年生になると、先生の転勤が決まりました。

私は、本当に不幸な人とは、「自分は愛情をもらえなかった」と思い込んでる人だと思えます。悪い家庭環境の中で育った子が、ずっと不幸な人生を送るのかという、絶対的なことはありません。あなたが大人になったという事実は十分愛情をもらった証なのです。それがたとえ母親でなくても、どこかで誰かが愛情を与えてくれたから、大人になることができました。

私は、本当に不幸な人とは、「自分は愛情をもらえなかった」と思い込んでる人だと思えます。悪い家庭環境の中で育った子が、ずっと不幸な人生を送るのかという、絶対的なことはありません。あなたが大人になったという事実は十分愛情をもらった証なのです。それがたとえ母親でなくても、どこかで誰かが愛情を与えてくれたから、大人になることができました。

私は、本当に不幸な人とは、「自分は愛情をもらえなかった」と思い込んでる人だと思えます。悪い家庭環境の中で育った子が、ずっと不幸な人生を送るのかという、絶対的なことはありません。あなたが大人になったという事実は十分愛情をもらった証なのです。それがたとえ母親でなくても、どこかで誰かが愛情を与えてくれたから、大人になることができました。

私は、本当に不幸な人とは、「自分は愛情をもらえなかった」と思い込んでる人だと思えます。悪い家庭環境の中で育った子が、ずっと不幸な人生を送るのかという、絶対的なことはありません。あなたが大人になったという事実は十分愛情をもらった証なのです。それがたとえ母親でなくても、どこかで誰かが愛情を与えてくれたから、大人になることができました。

社説

オビニオンエッセイ
魂の編集長 水谷 謹人

戦中戦後、「父親たち」は常に時代に翻弄されてきた。戦中は紙切れ一枚で戦場に駆り出され、戦直後は家族を食わせるために必死で働いた。高度成長が始まった1960年代、市場を海外に求めた「父親たち」は、諸外国から「エコノミックアニマル」と批判され、70年代には「ワーカールホリック(仕事中毒)」と揶揄された。何と言われようと働けば働くほど会社も個人も豊かになる時代だった。働いて稼ぐことで父親の威厳は保たれた。

80年代、家庭から「父親たち」の威厳は失墜した。残業がなくなり早く帰宅できるようになったが、家庭に父親の居場所はなかった。父親の洗濯物と家族のものを別々に洗う主婦が話題になったのもその頃だ。そして90年代が終る頃から中高年男性の自殺が急増し、その社会現象は2011年まで続いた。

森浩美の短編小説「小さな理由」(双葉社)にはそんな切ない父親たちが描かれている。いちばん新しい思い出の主人公、佐藤もその一人だ。「パブル」の時にはその経済力で家庭を維持できていたが、「パブル」が弾け、会社を倒産した。同時に家庭も崩壊した。離婚したのは1人娘の香織が10歳の時だった。その娘から突然電話が掛かってきた。今度の日曜日、遊びに行ってもいいかと。25歳の大人の声だった。15年ぶりに父親は再会した。母親には内緒で来たという。「誰に電話番号を聞いたんだ?と尋ねると、15年前家を出る日の朝、お父さんが『困ったことがあったら電話しなさい』と言ったこと、お父さんと呼ばないで」と言っていた。

娘は「頼みごとがある」と言った。小学生の頃、作文が苦手な、よくお父さんから手伝ってもらったよね。式の最後で読む親への感謝の手紙を書いたんだけど、今から読むのでおかしなところがあつたら直してほしい。感謝の手紙か。じゃあ練習に付き合おう。とやる。そうやって正座し目を閉じた。娘は読み始めた。本当のお父さんへ「えっ!」と佐藤は思った。手紙には、幼かった頃、父親と一緒に遊んだ思い出がたぐいさ綴られていた。それからお母さんと新しいお父さんとの間に妹ができた時、とても不安になったことや、「いい子にしないで」と捨てられるのではないかと考えたこと。

「本当は3人で暮らしたかった。どうして我慢してくれなかったのか?」と、かたがたが泣き始める。居たたまれず自分の部屋で耳を塞いでいたという恨みも書かれてあった。そして、お父さんのことが好きだった。でも式に出てもうえない。本当に「めんない!」と、嗚咽で言葉が出なくなった。佐藤もまた声を絞り出した。「分かってる。でも直すところはないよ。」あ、の時代、家族を大切に。か夫婦のコミュニケーションが大事。なんて言う人はほとんど周りにいなかった。死に物狂いで戦った気が抜けたように萎む。かなかなしなやかに生きられなかった昭和の父親たち。そんな父親に思いを馳せてみよう。6月17日は父の日だ。

私の家庭は共働き世帯です。実はこれまで一度も妻と喧嘩をしたことがありません。それは理由があつて、どちらかが我慢するのでなく、お互いに与え合う関係だからです。たとえば夫婦の喧嘩によくありがちなのは夫が家事に全く参加しないということです。私は家事をやりますが、やりすぎないように心掛けています。私の中で積極的に「家事」と積極的に「家事」を区別しているのです。積極的に「家事」とは、ゴミ捨てや洗濯物の取り入れ、食後の食器を流し、掃除機をかけること、それらが風呂掃除やトイレ掃除、子どもの面倒をみること、などです。特に「ゴミ捨て」洗濯物の取り入れ「食後の食器を流し」は持つていくことには共通点があります。それは移動です。A地点からB地点への移動。これは「クオリティ」(質)に差が出ていく家事です。つまり、私がやっても妻がやってもいい家事というわけです。一方、積極的に「家事」は、料理、台所の整理、洗濯物を干す、たむ、収納する、子どもを髪結い、などです。これらはクオリティ(質)やスキル技術

仕事に「磨き」をかける教科書

みやざき中央新聞 編集長 水谷もりひと著

変態になりたい人が増えている。雨か降ればなげなく傘をさす人に「若さこそ若者に与えるのは惜しい人は最後の最後まで成長し続ける」「時間がない」を禁句にしよう

感動はモノではなく「コト」だった。売れ上り心がつくりだしている。論議さんから聞いたお金の話。対戦相手ではなく「パートナー」に変わらねば社会の財産になる。

本に囲まれて「深呼吸」しよう。淡々と生きる「淡味」の素晴らしさ。日常のすべてを楽しい道場にする。▼口に触れないとフロロにならない

◎天運を変える人生ってどうですか

定価1,300円+税
http://www.gomashobo.com

人生で一番大切な授業

男性家庭科教師 末松 孝治

魔法の言葉「ありがとう」で幸せな家庭に

「ありがとう」は家事労働が報われる瞬間であり、相手にまたこの人のためをやってあげたいと思わせる魔法の言葉です。互い「ありがとう」を言い合える家庭は喧嘩のない幸せな家庭です。

さらに、親が「ありがとう」を口にすると、子どもまで「ありがとう」を口にするようになります。親が笑顔だと子どもも笑顔になります。それは幸せな家庭だと思います。私は、家政学や家庭科という教科は、幸せについて学び、幸せを実践する学問だと考えています。家庭科は幸せに生きるための必修科目なのです。(福岡県在住)

感性のビジネス書

仕事に「磨き」をかける教科書

みやざき中央新聞 編集長 水谷もりひと著

変態になりたい人が増えている。雨か降ればなげなく傘をさす人に「若さこそ若者に与えるのは惜しい人は最後の最後まで成長し続ける」「時間がない」を禁句にしよう

感動はモノではなく「コト」だった。売れ上り心がつくりだしている。論議さんから聞いたお金の話。対戦相手ではなく「パートナー」に変わらねば社会の財産になる。

本に囲まれて「深呼吸」しよう。淡々と生きる「淡味」の素晴らしさ。日常のすべてを楽しい道場にする。▼口に触れないとフロロにならない

◎天運を変える人生ってどうですか

定価1,300円+税
http://www.gomashobo.com

みやざき中央新聞は紙でも、WEBでも読むことができます

どちらかというとWEB版のほうが便利です

*2010年から最新号までのバックナンバーをすべてご覧いただけます。
*検索もできるので、何度でも読み返すことができます。

キーワードを入力して検索ができます

講演者名をクリックすると、その方の記事がすべて表示されます。

紙+WEB版: 1,500円 (税別)
紙で読んでWEBで検索・保存しませんか?
WEB版のみ: 1,000円 (税別)

【編集部】 株宮崎中央新聞社 〒880-0911 宮崎県宮崎市田吉6207-3
Tel (0985) 53-2600 Fax (0985) 53-5800
みやざき中央新聞 編集長 e-mail: info@miya-chu.jp